

例　　言

1. 本書は、平成4年度から現在も実施中の県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、平成7年度に実施した高野原遺跡E区からG区における調査結果を報告するものである。

2. 本遺跡の調査は、下記の通り実施した。

平成7年度 発掘調査、概要報告書作成

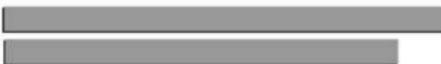
平成11年度 室内整理、報告書作成

3. 本遺跡の現地調査及び室内調査は、宮崎県中部農林振興局からの受託事業と文化庁の国庫補助事業を得て川野町教育委員会が実施した。調査体制は以下の通りである。

(平成7年度)	教　育　長	鍋　倉　政　信
	社会教育課長	前　田　久　育
	社会教育課長補佐兼係長	川　口　博　文
	同　主　查	長　友　カツ子（調査事務担当）
	同　主　任	森　田　浩　史（調整・事務担当）
	同　主　事　補	金　丸　武　司（発掘調査担当）

(平成11年度)	教　育　長	堀　内　侃
	社会教育課長	永　谷　弘
	社会教育係長	有　村　勝　弘
	同　主　查	森　田　浩　史
	同主任主事	金　丸　武　司

4. 出土遺物、図面等の整理にあたっては、次の方々の補助を得た。



5. 本書の執筆は金丸が担当した。

6. 現地の調査にあたっては、元野地区をはじめ田野町在住の方々の参加を得た。

7. 本書に用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。

8. 本書に用いた土色は、農林省農林水産技術会事務局監修の「標準土色帳」による。

9. 本書における造構の表示には、右記の記号を用いた。 集石造構 = S I

10. 出土遺物は田野町教育委員会文化財調査事務所及び文化財収蔵庫に保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の結果	3
第1節 調査の概要	3
第2節 層位	3
第3節 検出遺構	7
第4節 出土遺物	13
第Ⅲ章 まとめ	22

図版目次

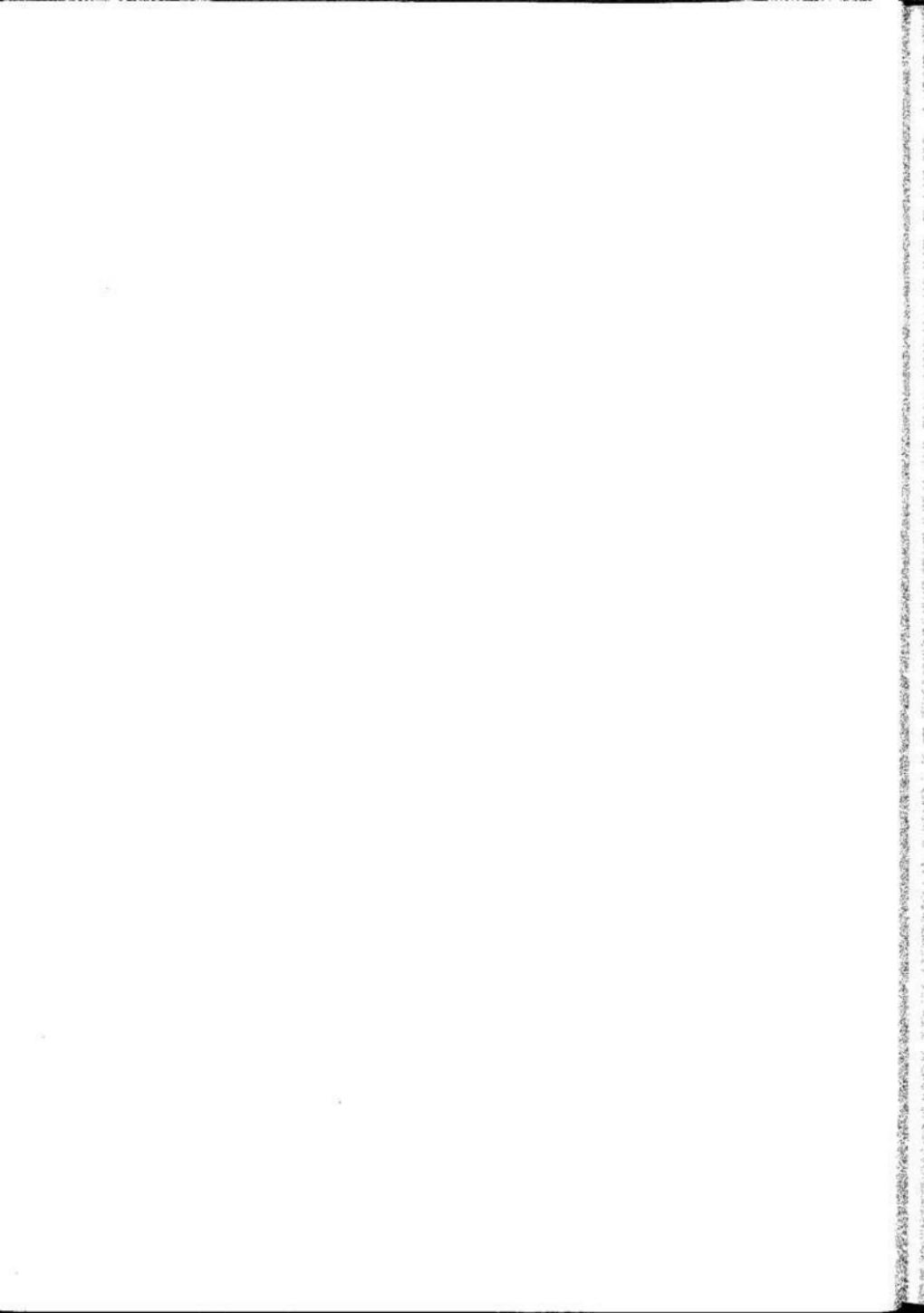
第1図 町内遺跡分布図	2
第2図 調査区周辺地形図	4
第3図 E区トレント配置図	5
第4図 F区トレント配置図及び遺構分布図	5
第5図 G区遺構分布図	6
第6図 積群実測図	8
第7図 集石遺構実測図	10
第8図 集石遺構実測図	11
第9図 集石遺構実測図	12
第10図 出土石器実測図	14
第11図 出土土器実測図	16
第12図 出土土器実測図	18
第13図 出土土器実測図	19
第14図 出土石器実測図	20
第15図 出土石器実測図	21

表目次

表1 出土遺物観察表（旧石器時代）	14
表2 出土遺物観察表（縄文時代土器）	23
表3 出土遺物観察表（縄文時代石器）	24

写 真 目 次

図版1	調査着手前遠景	25
図版2	F区遺構検出状況	26
図版3	G区遺構検出状況	26
図版4	SI-01検出状況	27
図版5	SI-02検出状況	27
図版6	SI-07検出状況	28
図版7	SI-09検出状況	28
図版8	SI-12検出状況	29
図版9	SI-13検出状況	29
図版10	SI-17検出状況	30
図版11	SI-18検出状況	30
図版12	SI-19検出状況	31
図版13	SI-20検出状況	31
図版14	SI-22検出状況	32
図版15	SI-23検出状況	32
図版16	SI-24検出状況	33
図版17	SI-25検出状況	33
図版18	SI-26検出状況	34
図版19	SI-27検出状況	34
図版20	出土遺物（旧石器時代の遺物：表）	35
図版21	出土遺物（旧石器時代の遺物：裏）	35
図版22	出土遺物（縄文時代の土器）	36
図版23	出土遺物（縄文時代の土器）	37
図版24	出土遺物（縄文時代の土器）	38
図版25	出土遺物（縄文時代の石器）	39
図版26	出土遺物（縄文時代の石器）	40



第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯

田野町は宮崎市の西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、周囲を取り囲む鰐塚山系をはじめとする山地及びその麓に形成された扇状地や河岸段丘などからなり、1市（宮崎市）と5町（清武町、高岡町、山之口町、三股町、北郷町）に接している。これまでの主産業は、大根や薙穂草などの農業に依存していたが、近年は工業団地の整備や専門学校の誘致、宅地開発などにより、次第に変化・発展しつつある。しかしその一方では農業基盤整備や各種の開発事業に伴う埋蔵文化財の保存が大きな問題となっており、町教育委員会でも調整や調査体制の整備・充実を図ってきた。しかし、これらを含めた開発事業との調整は困難を極め、遺跡の大部分は記録保存の対象となり消滅しているのが現状である。

平成7年度は県営農地保全整備事業元野地区が実施されることとなり、事業地内に県文化課が分布を確認するために試掘調査を行ったところ、部分的に縄文時代早期の遺構、遺物が分布することが明らかとなった。平成7年4月20日に中部農林振興局、県文化課、町農業整備課、町教育委員会の四者で協議を行い、設計施工上やむを得ず消滅を免れない部分について発掘調査による記録保存を実施することとなり、平成7年9月4日付けで委託契約を締結、同年9月10日から現地の調査に着手した。

調査は、田野町内の皆様のご協力を得ながら同年12月7日に終了した。同遺跡の調査面積は約5,450m²に至った。

第2節 遺跡の立地と環境

田野町は、宮崎平野と都城盆地のおおよそ中間地点にある。盆地部はシラスにより形成された台地が発達しており、その上に鰐塚山をはじめとして周囲の山間部から流れ込む河川が深い谷を刻みながら合流する。

今回調査の行われた元野地区は、清武川の支流である片井野川と別府田野川の合流する地点、標高160mの台地上に立地する。ここは田野盆地に向かってせり出す元野台地の尖端部にあたる。この台地には、他に平成4年度に調査が行われた本野遺跡や、平成5・6年に調査の行われた高野原遺跡（A区～D区）が立地する。この一連の調査により、縄文時代早期から前・中期を経て後期の遺物が確認されたほか、弥生時代中期末から後期にかけて、集中的な遺物の出土が確認された。また、古墳時代の地下式横穴墓も1基検出されている。他にも別府田野川の対岸には縄文時代早期から後期にかけての遺物が多量に出土した黒草遺跡が立地するなど、この一帯は先史時代の遺跡集中地として知られている。



第1図 町内遺跡分布図 (1 : 50,000)

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 調査の概要

高野原遺跡E区からG区は田野盆地に向けて舌状に伸びる元野台地の南東部の突端に位置する。この地点は東側から開析谷が入るもの地形に大きな影響はなく、また調査区の北側へ向けてやや傾斜するものの、調査区内で大きな凹凸を形成せず、平坦に近い地形である。

本遺跡の調査にあたっては、まず削平される箇所を3カ所に分けこれをそれぞれE区、F区、G区と設定し、機械による掘削を行った。これに当たっては、周辺の調査区で確認されている弥生時代の遺構を想定し、アカホヤ火山灰層上面で観察を試みたが、この時点では遺構の分布が確認されなかつたため、前段階で実施された試掘調査のデータに基づいて、縄文時代早期の遺構、遺物に対象を絞ってアカホヤ火山灰層を除去し、手堀による遺物包含層並びに遺構検出作業を行つた。その結果、E区では小標がごく僅かに出土する程度の分布に留まつたが、F区においてはその北部において標群を1基と14基の集石遺構を検出した。ただ、土器や石器などの遺物は少量であった。一方、G区からは15基の集石遺構が検出された。この調査区からは、黒曜石の剥片や碎片類が多量に出土し、石鏃も多く出土した。

第2節 層序

層序は以下の通りである。本遺跡の土層の堆積は、台地の尖端部でありながら、G区の一部で確認された現代の削平を除き、調査区内で殆ど変化はなかった。

第I層：耕作土層（約30cm）10YR暗褐3／4

軟質でサラサラし、粘性は殆どない。

第II層：黒色土層（約60cm）10YR黒褐2／2

軟質の上層である。弥生時代の生活址は確認されなかつた。

第III層：アカホヤ二次堆積層（約10cm）10YR黄橙7／8

II層とIV層の混ざったような層であり、粘性があり、水分をやや含む。

第IV層：アカホヤ二次堆積層（約25cm）2.5Y黄7／8

III層に比べ、V層の度合いが高いが、やや粘性がある。火山ガラスは多く含む。

第V層：アカホヤ火山灰層（約5cm）2.5Y黄7／8

IV層と色調において変化はないが、堅く締まっており、混入物は全く認められない。

第VI層：早期ローム層（約60cm）2.5Y黒褐2／2

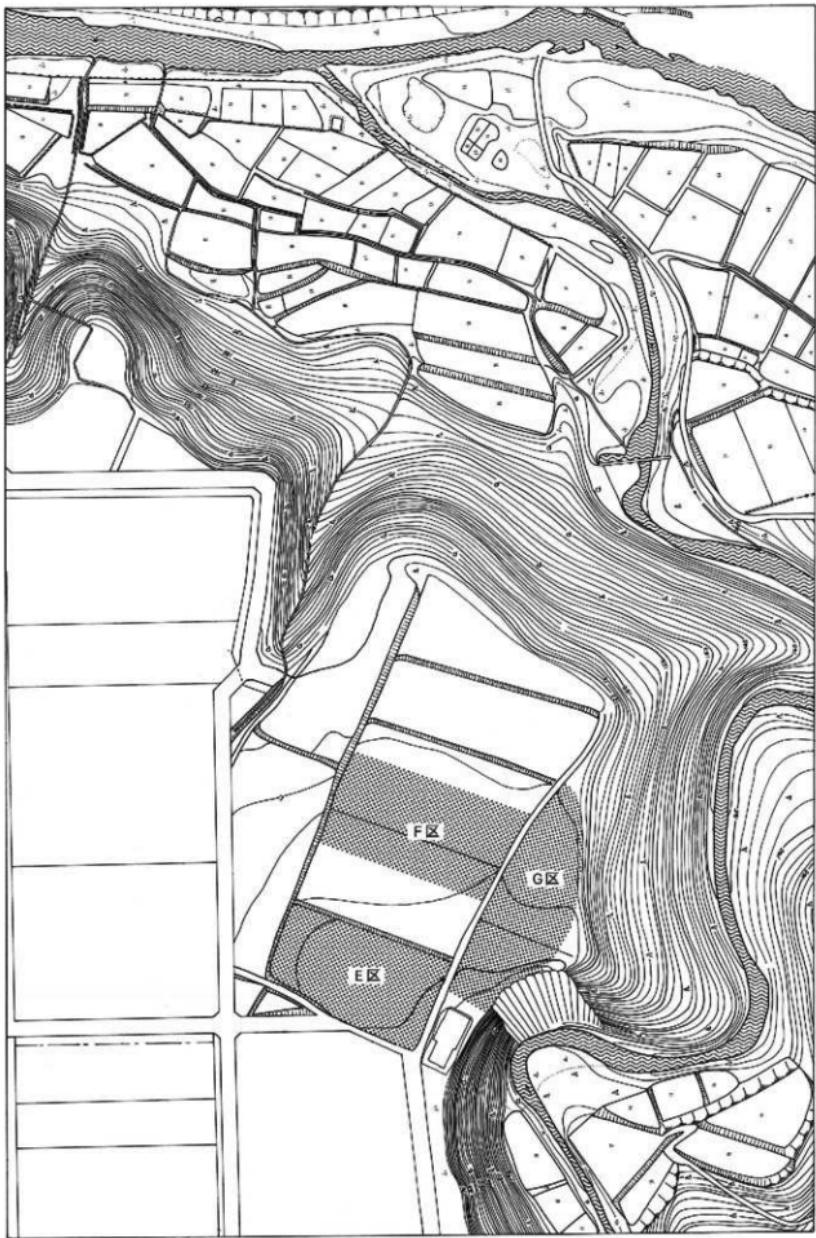
縄文時代早期の遺物包含層。上層に大隅降下軽石層は確認されなかつた。

第VII層：姶良丹沢火山灰（シラス）層（約150cm）10YR明黄褐6／8

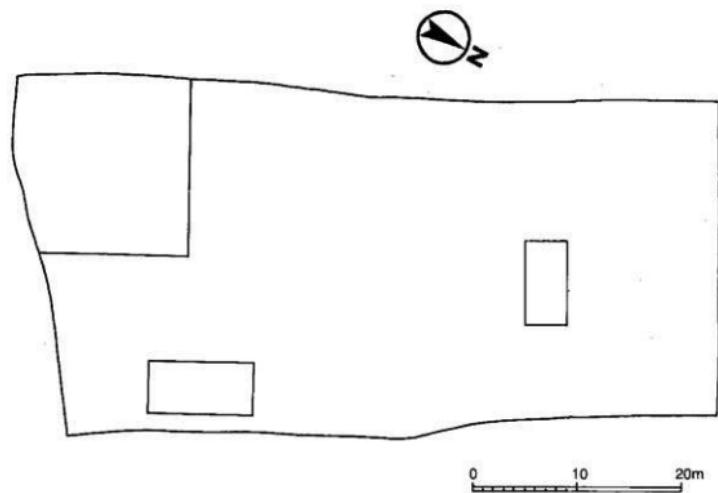
火山ガラスと軽石を多量に含む層。風化すると白色に変化する。

第VIII層：標層

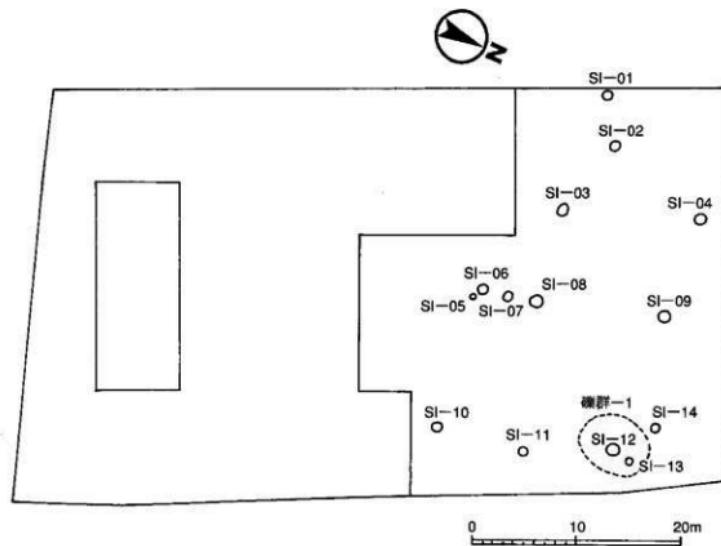
人頭大から親指大の標によって構成される層。数メートルにわたつて堆積する。



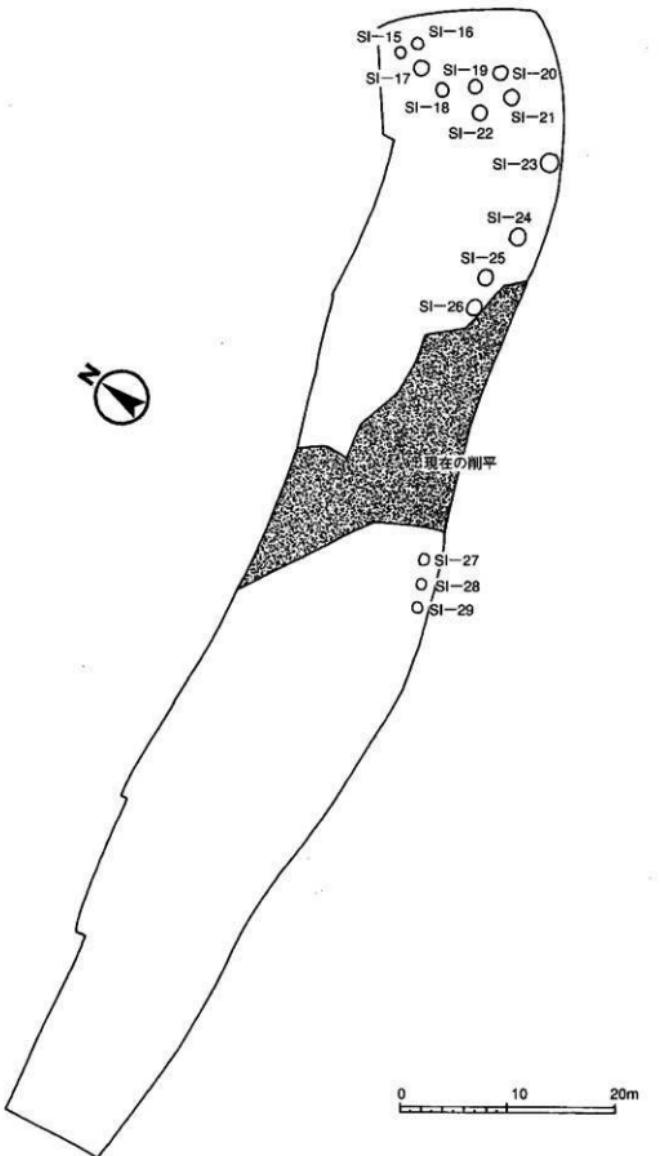
第2図 高野原遺跡調査区周辺地形図



第3図 E区トレンチ配置図



第4図 F区トレンチ配置図及び遺構分布図



第5図 G区遺構分布図

第3節 検出遺構

本遺跡からは、疊群と集石遺構が検出された。以下に説明を加えたい。

疊群

F区南東部において1基検出された。疊は中央部が密集しており、対して周辺部はまばらである。この疊群にはSI-12が検出されたほか、SI-13も一部含まれる。

疊群を構成する疊は角疊が殆どであり、これは台地中に見られるシラス層の下位を構成する疊層と酷似する。これらの疊は被熱しているが、疊層にある時点で既に赤変しているものも多く、遺跡内で熱を使用した際のものとは言い切れない。

集石遺構

E区では検出されなかつたが、F区から14基、G区からは15基が検出された。分布としては、F区では調査区北側に間隔を置いて検出されたのに対し、G区では台地の縁辺部に沿う形で列状に検出された。

(SI-01)

長軸85cm、短軸80cmのほぼ円形を呈する。円疊が多く使用される。

(SI-02)

長軸120cm、短軸100cmである。疊は散在しており、小ぶりの疊が多い。

(SI-03)

長軸80cm、短軸65cmであるが、密集地点はほぼ円形である。

(SI-04)

長軸90cm、短軸50cmであるが、疊はまばらでプランがわかりにくい。

(SI-05)

長軸40cm、短軸30cmであり、大変小型である。構成する疊も小ぶりである。

(SI-06)

長軸75cm、短軸70cmである。大きな疊が多いが、まばらである。

(SI-07)

長軸70cm、短軸55cmである。ここからは深さ約10cmの明確な掘り込みが確認されたが、断面形は掘り鉢状ではなく、不定形である。

(SI-08)

長軸105cm、短軸55cmの長円形である。疊は小振りのものが多く、掘り込みは僅かにあるが10cm未満程度である。

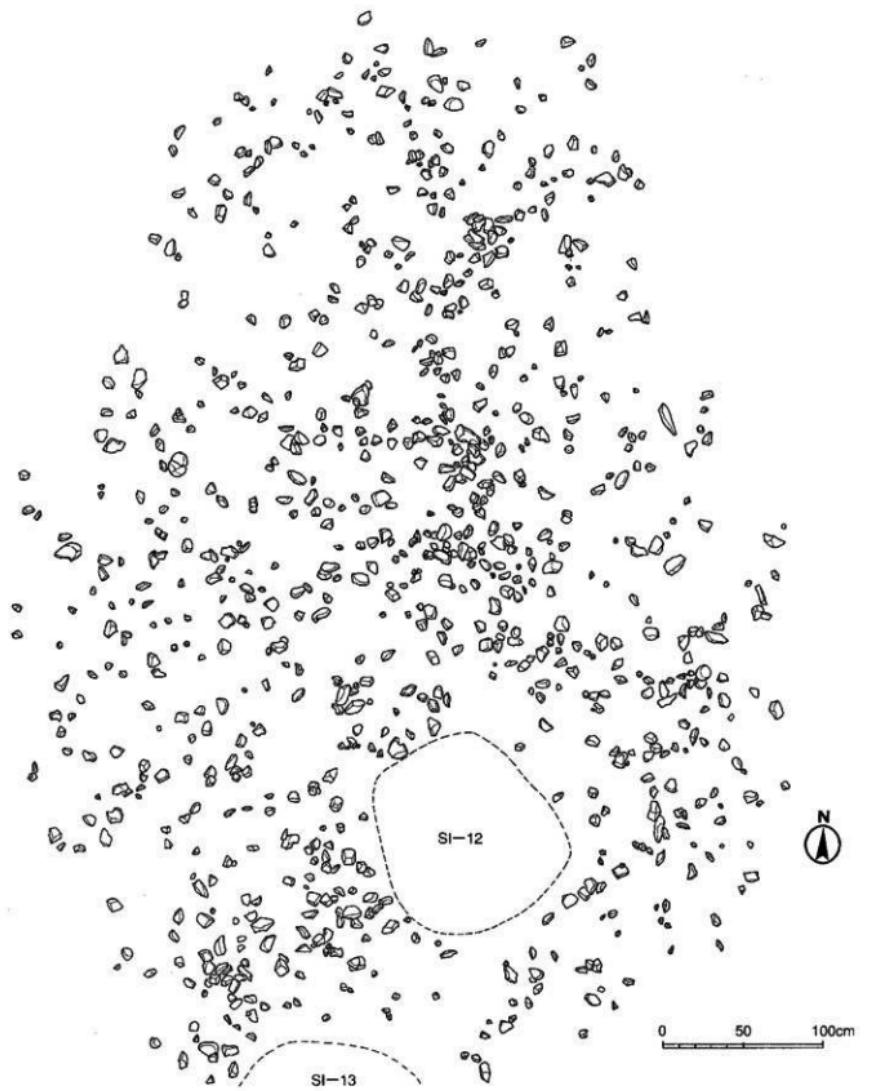
(SI-09)

長軸85cm、短軸80cmのほぼ円形である。中央部には扁平な円疊を用いており、構築する際の意図を窺わせる。ここからは深さ15cmの掘り込みが確認された。

(SI-10)

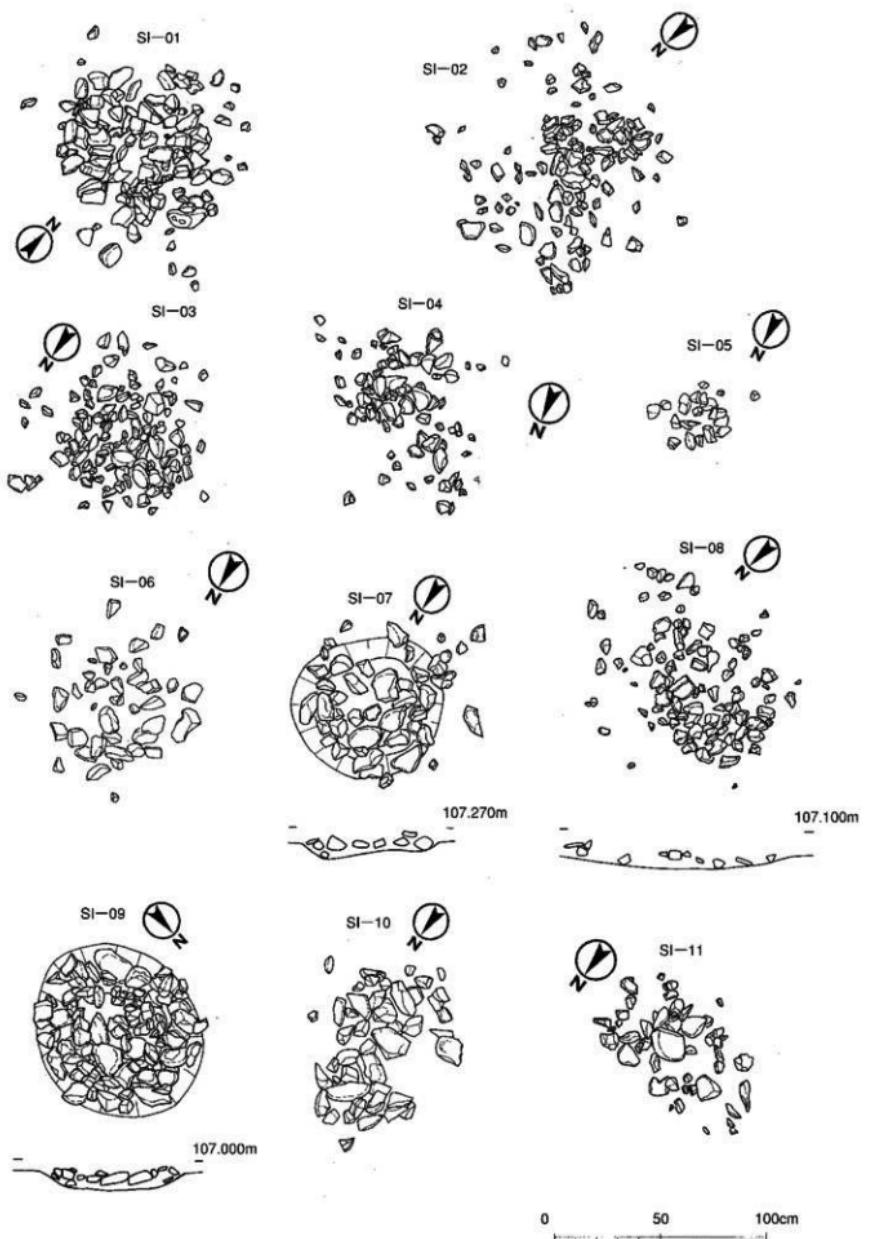
長軸58cm、短軸70cmである。疊は大ぶりのものが多い。

(SI-11)

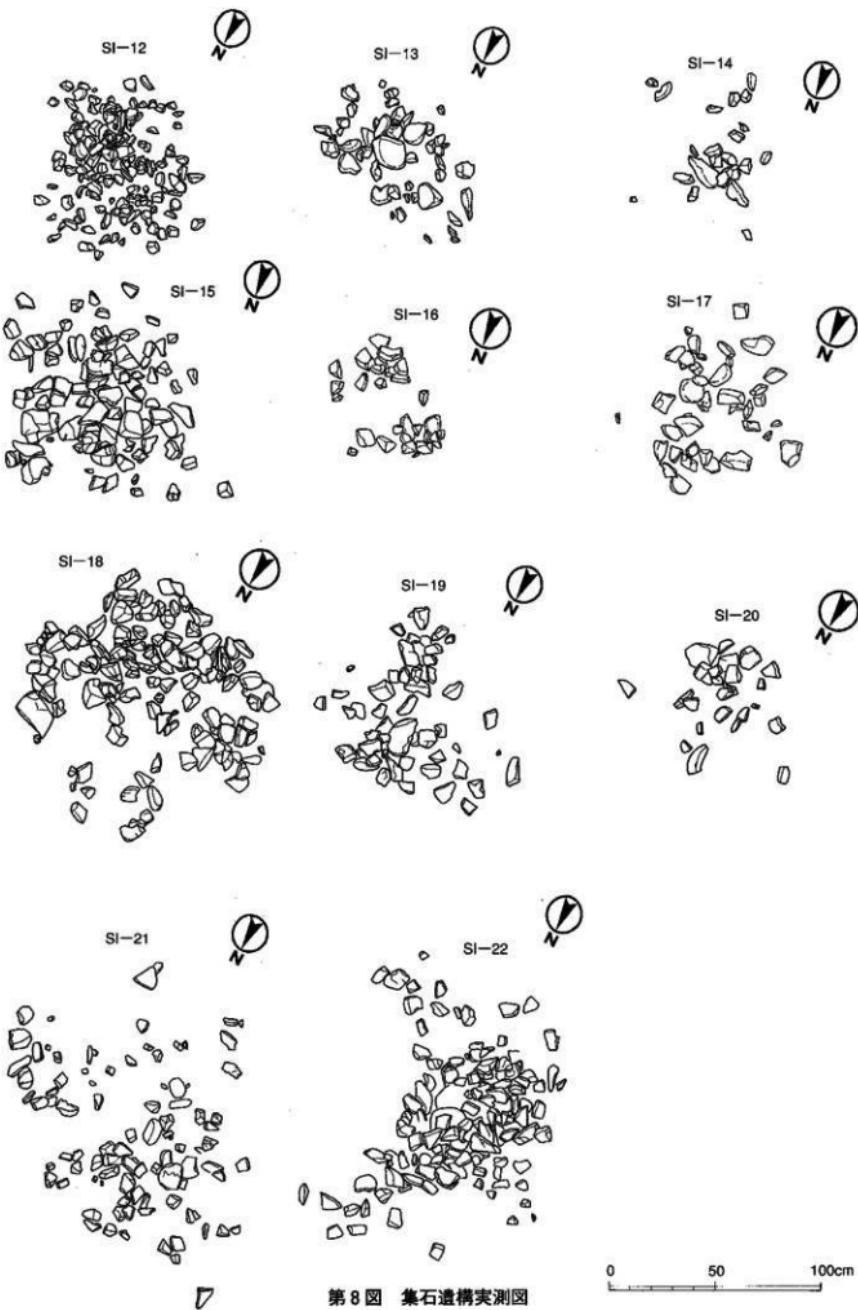


第6図 磨群-1 実測図

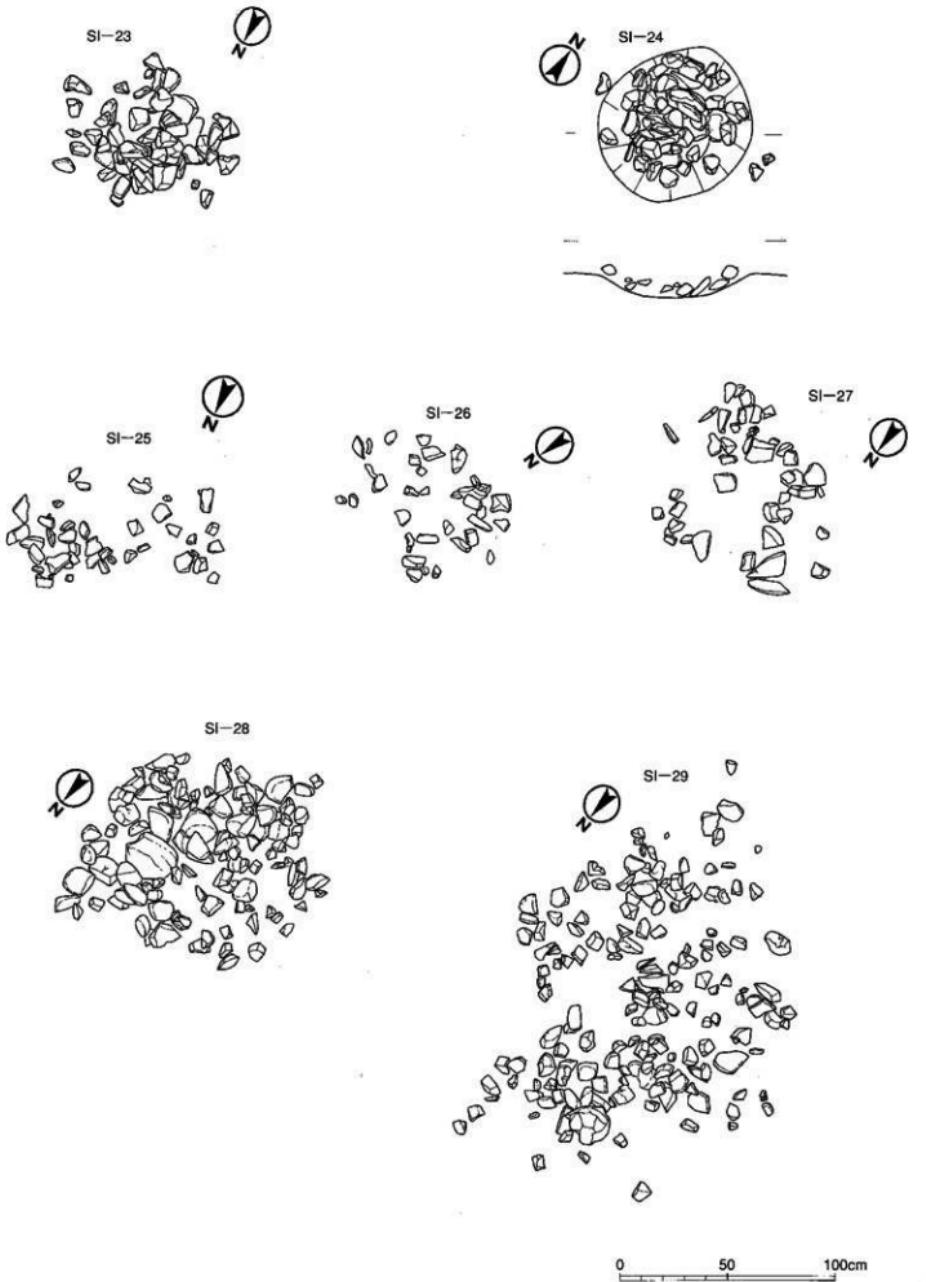
- 長軸90cm、短軸50cmである。碟はまばらであり、まとまりに欠ける。
- (SI-12)
長軸85cm、短軸75cmである。小ぶりの円碟で構成される。
- (SI-13)
長軸90cm、短軸50cmの長円形である。構成される碟の大きさは様々である。
- (SI-14)
長軸55cm、短軸50cmである。数個の碟のみのものであるが、被熱が激しい。
- (SI-15)
長軸90cm、短軸85cmであり、大ぶりの角碟が多いのが特徴である。
- (SI-16)
長軸60cm、短軸50cmである。小型の角碟で構成される。
- (SI-17)
長軸75cm、短軸70cmであり、碟は少なくまとまりに欠ける。
- (SI-18)
長軸130cm、短軸125cmである。大型の遺構であり、碟は密集している。
- (SI-19)
長軸90cm、短軸85cmである。不定形であるが、集中部は長円形を呈する。
- (SI-20)
長軸65cm、短軸50cmである。数個の碟が集中し構成される。
- (SI-21)
長軸150cm、短軸110cmである。碟は散在しており、まとまりがない。
- (SI-22)
長軸100cm、短軸70cmであり、碟は大変密集している。
- (SI-23)
長軸90cm、短軸70cmである。碟は密集している。
- (SI-24)
長軸65cm、短軸50cmである。碟は密集しており、また深さ約20cmの明確な掘り込みも検出された。
G区の集石遺構では珍しく円碟が多く用いられている。
- (SI-25)
長軸100cm、短軸40cmである。長円状であるが、全体的なまとまりがない。
- (SI-26)
長軸80cm、短軸70cmである。角碟のみで構成される。
- (SI-27)
長軸105cm、短軸75cmである。大ぶりの碟が多いのが目立つ。
- (SI-28)
長軸120cm、短軸100cmである。碟は密集しており、大小の碟が使用される。
- (SI-29)
長軸150cm、短軸130cmである。碟の殆どが角碟で構成される。



第7図 集石造構実測図



第8図 集石構造実測図



第9図 集石遺構実測図

第4節 遺物

本遺跡からは、旧石器時代から縄文時代早期の遺物が出土した。以下時代別に説明を加えたい。なお、出土層位は全てVI層である。

旧石器時代の遺物（第10図）

ナイフ形石器（1・2）

(1) は連続的な縦長剥片剥離の工程により生じた厚手の剥片の素材として、二側縁に調整を行ったものである。調整は両縁とも基部に集中し行なわれているが、このときの調整でバルブもカットされている。右側縁は刃潰しを目的として急角度の連続的な剥離が行われているが、左側縁は基部以外はナイフ形石器としての成形を意図したのか、小規模な剥離を縁辺に施すのみである。また、剥離痕はポジ面にも残される。右側縁の剥離痕は連続性があり、ノッチを形成するが、ほかは散発的である。

(2) は両極より剥離を行った、疊面を打面にした薄手の縦長剥片を素材としたものである。これも(1)と同じく左側縁に刃部を設定しており、左側縁の刃潰しは基部に2度行われるのみであるが、右側縁の調整は欠損部まで継続する。上部を失っているが、それほど大型の製品にはならないようと思われる。

細石刃核（3・4）

(3) は黒曜石の小蝶を成形した後に、一辺を作業面として細石刃剥離を行ったものである。剥離作業に当たっては、事前に側面と底部を加撃を行い成形した後、微細な打面調整を行い細石刃剥離作業に移っている。こうした工程の復元から、この細石刃核は野岳型に属すると考えられる。

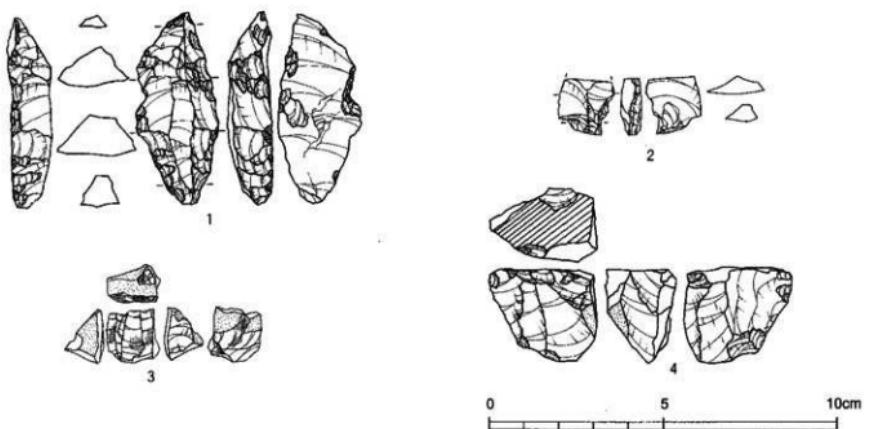
(4) は節理面を打面として側面調整を行い成形したものである。成形は更に下端部からも行われ、全体的に断面形をV字状にしようとした意図が窺える。これは、船野型細石刃核の石核成形の工程に沿ったものと考えられる。節理面である打面の両縁に残された小剥離は、本体固定と思われるが、細石刃剥離作業を行った形跡はない。そのため器種はプランクとした。

縄文時代の遺物（第11～13図）

土器

前平式土器（5・6）

(5) は頸部まで外反しつつ、口縁部で僅かに内湾する薄手の器形を有する土器であり、口縁直下に2列の異なる種類の貝殻腹縁刺突を施す。下位は貝殻条痕が微かに施される。(6) は胴部からやや外反しながら口縁が直行する器形であり、外面は貝殻腹縁刺突が横位に2列施文され、下位に楔状突起が1列巡る。胴部以下はローリングが顕著であるため、文様は定かでなく、知覧式である可能性も考えられる。



第10図 出土遺物実測図（旧石器時代の遺物）

No	器種	長さ(打面長)	幅(打面幅)	厚さ(作業面長)	石 材	備 考
1	ナイフ形石器	5.5	2.4	1.3	チャート	表面採集
2	ナイフ形石器		1.6	0.7	流紋岩	上部欠損、VI層より出土
3	細石刃核	1.55	1.25	1.5	黒曜石	VI層より出土
4	プランク	3.0	1.8	2.55	ホルンフェルス	表面採集

表1 出土遺物観察表（旧石器時代）

吉田式土器（7）

口縁部がやや外反する器形であり、器面は工具による押引きを多用する。口縁直下の櫛状の工具によるモチーフは、楔状突起を思わせる。また、内面は丁寧に磨かれており、器壁は著しく薄手である。このような特徴から、吉田式の中でも岩之上遺跡で出土したタイプと同類と考えられる。

貝殻条痕文土器（8～17）

外面に貝殻条痕文を施し、土器の口縁部に貝殻腹縁による刺突文が一列ないしは数列施文される。（8）は口縁部に貫通する補修孔を残す。器形は胴部で膨らみ気味になりながら口縁部で外反する器形である。復元した限りでは、小形の深鉢形の器形になる。

（9～13）も同様の文様を外面に施し、内外面の調整も共通するが、外面の貝殻条痕がより丁寧に施文されており、またこちらの方が大型になる。これらは色調や胎土においても共通する部分が多く、同一個体である可能性が高い。（14）は口縁部直下が貝殻の腹縁を縱位に刺突したものであるが、これもこの一群のバリエーションの一つと考えられる。（15～17）は胴部にあたる。貝殻条痕文を斜位に施す。

桑ノ丸式土器（18～21）

（18）は、外面の崩落が激しく不明瞭であるが、胴部に櫛状の工具を用い、波状の文様を横位に施文したものである。（19）は内湾気味の口縁部であり、外面は鋭利な工具による縱位の短沈線で埋められているが、これもこの土器群の一つと考えられる。

（20、21）は羽状の短沈線が横位に施文される。器壁は比較的薄く、焼成も良好である。これらは桑ノ丸式土器の中でも辻タイプとして分類されるものである。

下剥峰式土器（22～24）

工具による刺突文を施文したものである。（22）は横位に施文されることを意識しており、工具は細かいものを使用し、器壁も厚いのに対し、（23、24）の施文は縱位であり、使用された工具も粗大で器壁が薄い。

内面の施文はヘラ状の工具によって横位の削りが行われており、これは桑ノ丸式土器や辻タイプにも共通した要素といえる。

塞ノ神式土器（25）

数条の沈線文の間を棒状の工具によって刺突したものである。口縁部が大きく開いていることから、塞ノ神式土器として分類した。

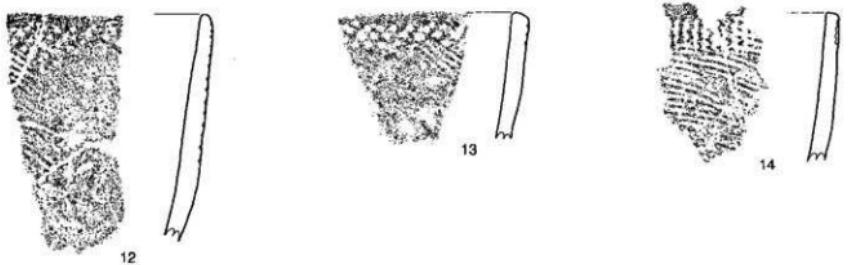
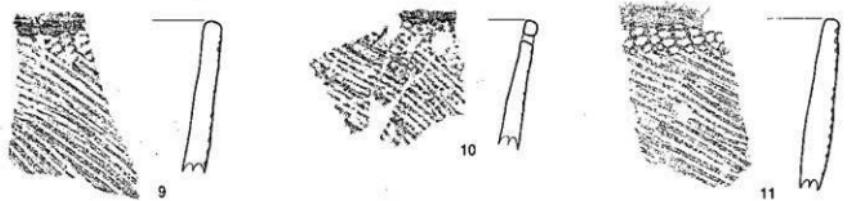
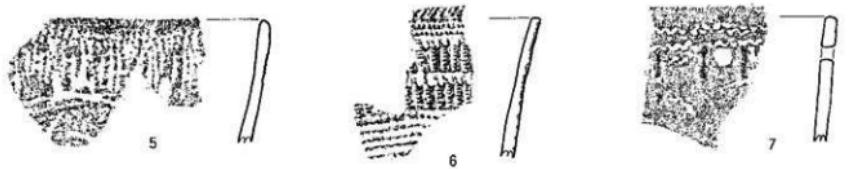
押型文土器（26）

楕円の押型文である。文様に用いられた楕円の粒は小さいが、器壁が比較的厚手であるため、時期的にそれほど遡るものとは考えにくい。

その他の土器（27～34）

（27～29）は同一個体である。口縁部に隆帯が貼り付けられ、隆帯の上部には下剥峰式土器の胴部に見られる刺突文が横位に施文され、下部には二枚貝の腹部を押しつけたような痕跡が残る。器形は胴部から外反しながら、口縁部で内湾する。施文の前段階の調整はナデが用いられるものの粗雑である。

（30～32）は外面に貝殻による条痕が施文された一群である。貝殻条痕文土器に類似するが、口縁部



0 5 10cm

第11図 出土遺物実測図（縄文時代の土器）

直下に刺突が行われないことや、貝殻条痕文が粗雑であることから別の分類にした。

(33) はごく薄手の無文土器である。(34) は無文の底部である。

縄文時代の石器（第14、15図）

本遺跡からは、土器の出土が少量のみに留まった反面、特にG区より多くの石器が出土した。

その大部分が黒曜石製のチップである。これらは微細なものが殆どであり、石器製作でも仕上げの段階で生じたものと考えられる。また、黒曜石の原礫も多数確認されたが、そのどれもが観指大程度である。

石鏃（35～109）

(35～95) は完成品である。これは、抉りが大きくハート形になるものと、抉りが殆どなく三角形状を呈するものに大別が可能であり、出土量はほぼ同じながら、前者は大きさがまちまちであるほか、材質はチャートが主体であり、一方後者は小振りのものが多く、その殆どが黒曜石製であるのが特徴である。

(96) 以下は未製品である。剥離面の観察から、まず周辺に剥離を行い大まかな形状を整えた後に、尖端部や抉り部の仕上げを行っていたことが窺える。

二次加工剥片（110～114）

(110) は面的な剥離が表裏面に残される。上部を折損しているが、尖頭状石器の基部である可能性が高い。(111～113) は、不定方向から剥離を行った小形の剥片を素材として、二次加工を行ったものである。恐らくは石鏃の制作の工程上で破棄されたものと推測される。(114) は縦面付近の剥片の縁辺を調整したものである。尖頭状石器とも取れなくもないが、尖頭状にする意図がそれほど見られない点や形状から、二次加工剥片とした。

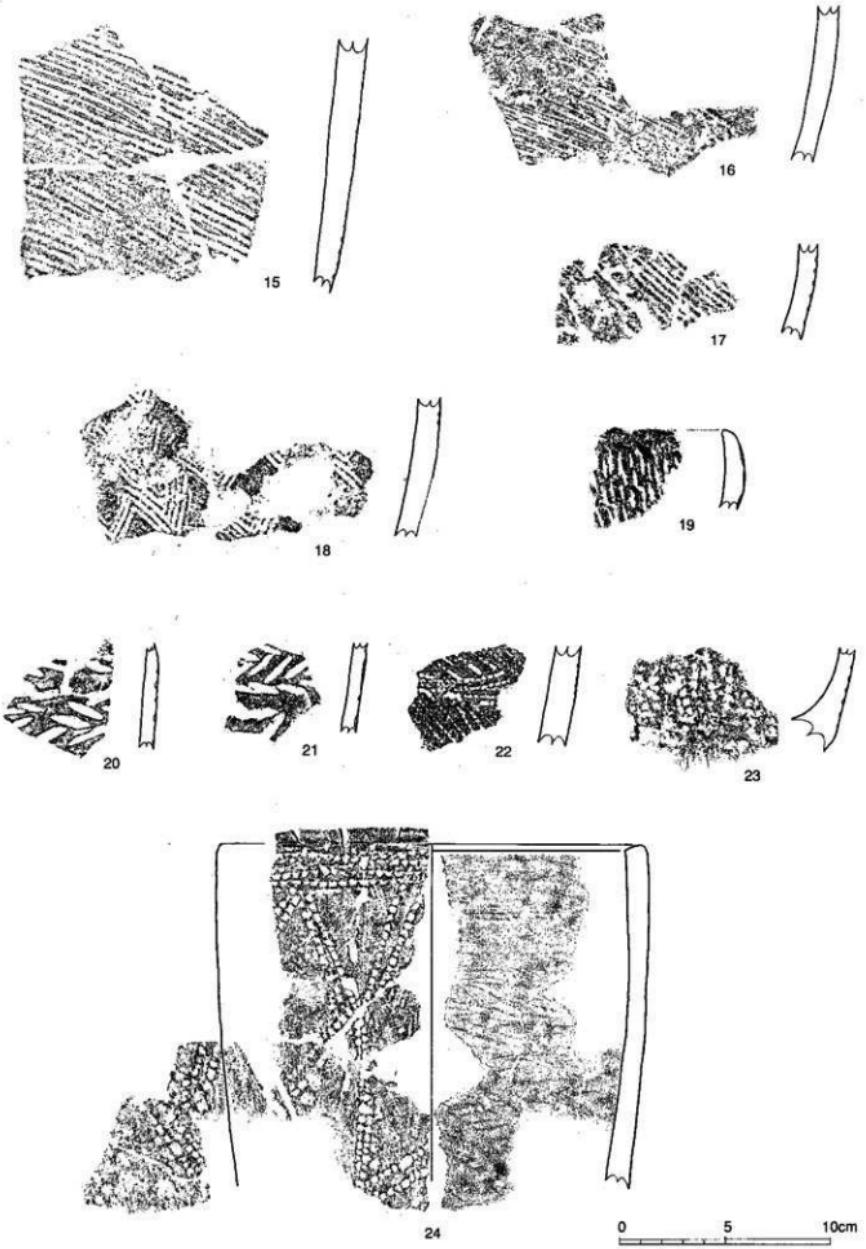
尖頭状石器（115～118）

(115～117) は、周縁を加工し尖頭状に仕上げているが、一般に尖頭状石器とされるものに比較すると小ぶりである。(118) は左右対称形であることから、完成品であると考えられる。

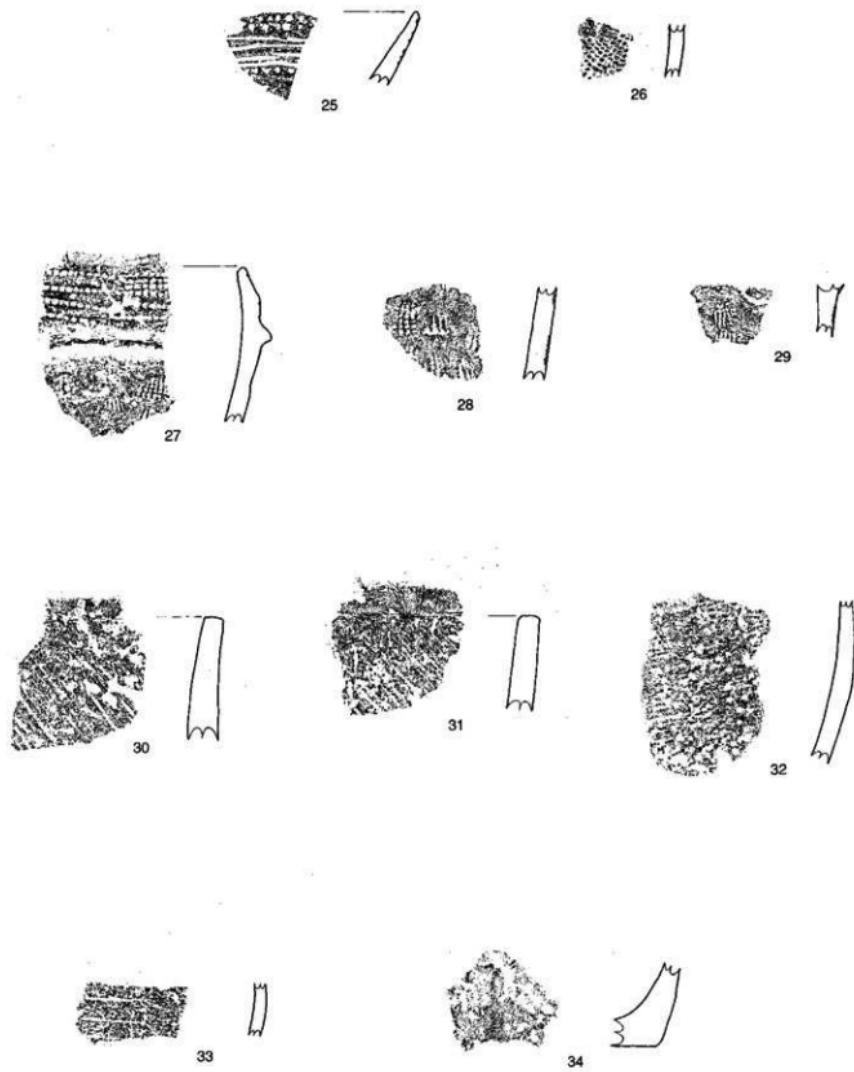
これらは、(116) を除く全てが小型の剥片を用いており、主要剥離面を残すように製作されていることも特徴の一つである。町内で出土する尖頭状石器は、チャート製のものが多く、その傾向は本遺跡でも認められる。

剥片（119～124）

(119) の表面には剥離面が顕著に認められるが、それらを観察すると、まず下面からの剥離を行ったのち、剥片の上部からおびただしく打撃を行い、打面を転移し剥片の右側縁から剥片剥離を行ったのも、再度頭部に打面を設定し剥片を作出した経緯が窺える。剥片は肉厚であり、使用された痕跡は認められない。(120) は姫島産と考えられる黒曜石を用いた剥片である。左側部と剥片末端部より二次加工を行う。(121) は頭部より剥離を行う工程中に剥離されたものである。下縁部の断面形は銳利であり、左側縁には、それを刃部として使用した痕跡が残る。(122) は、打面を転移し剥離した際の剥片である。(123) は元は薄手の剥片であったが、折損により下部のみ残されたものである。しかし、表

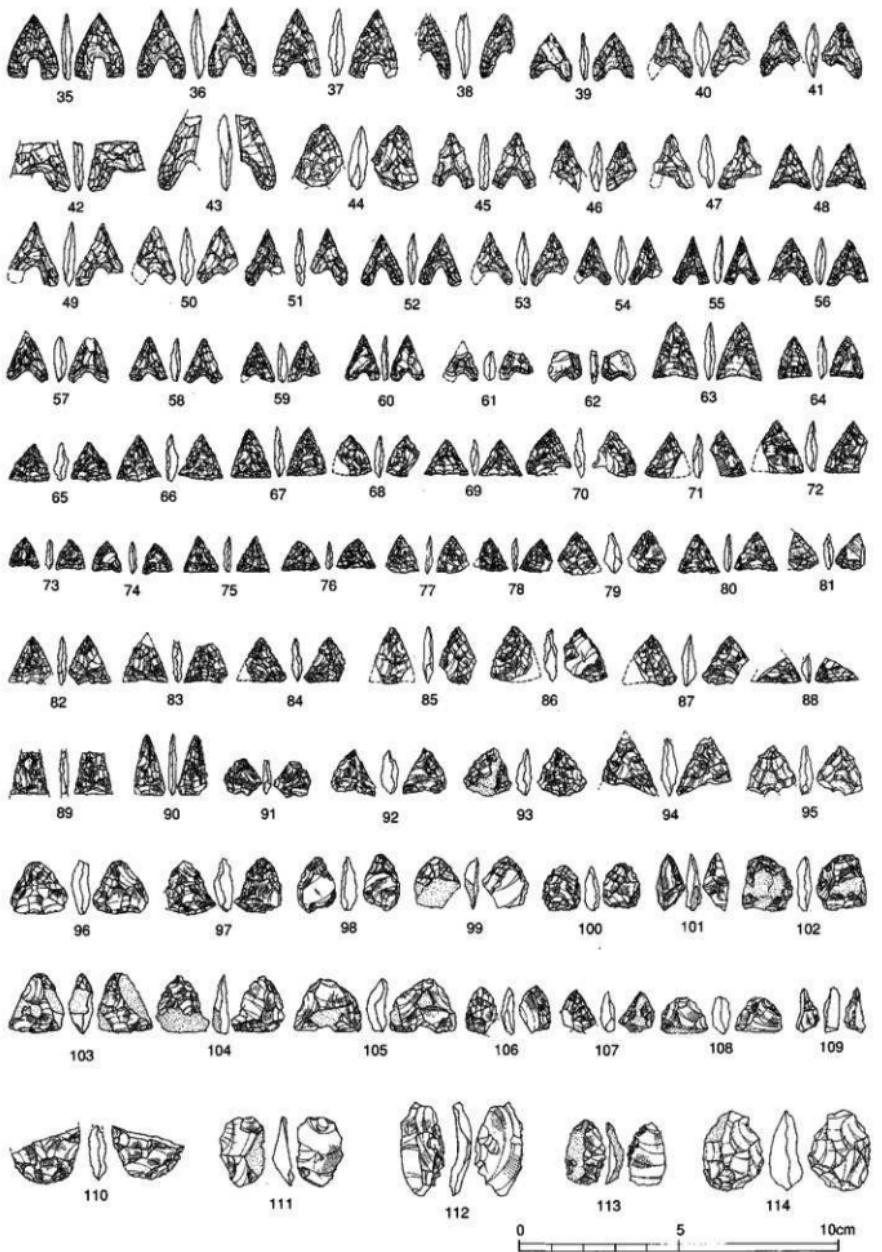


第12図 出土遺物実測図（縄文時代の土器）

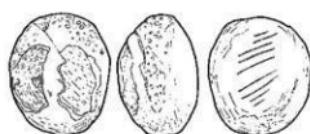
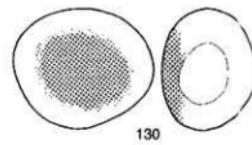
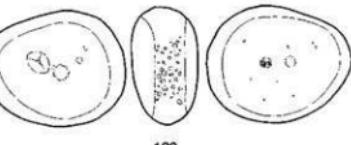
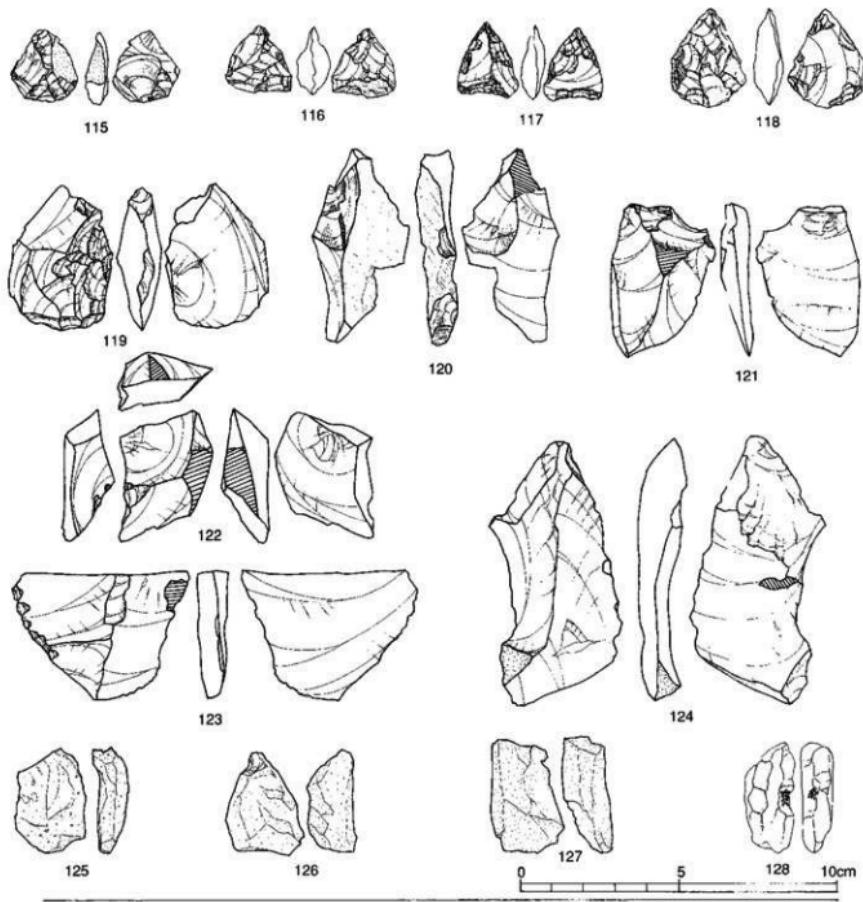


0 5 10cm

第13図 出土遺物実測図（縄文時代の土器）



第14図 出土遺物実測図（縄文時代の石器）



0 5 10cm

第15図 出土遺物実測図（縄文時代の石器）

面上部の小剥離は、折損後に行われたものであり、再利用を意図したとも考えられる。また、左側部は小剥離痕が連続的に並んでいるが、これは二次的な加工であり、スクレイパーとも取れる。(124) は縦長の剥片である。不定方向から剥離が行われたものであり、剥片を作出したのち、二次的な加工としてバルブカットを行っている。

原礫 (125~128)

(128) の玉髓以外は全て黒曜石製である。これらは全て親指の第1関節大であり、石錐以外の製品を製作するのは極めて困難であったと予想される。(126) には一部に小規模な剥離痕が認められるものの、そのほかは全く加工が行われない。

磨石 (129, 130)

(129) は、楕円形の磨石である。縁辺には敲打痕が顕著に残され、全面に使用の際の摩滅が認められる。また、比較的平坦になった部分の中央は窪んでおり、凹石としての使用も行われたことも示している。(130) も楕円形であるが、使用の行われたのは比較的平坦な部分であり、顕著に摩滅している。このほかには、使用に関する敲打痕等は認められない。

用途不明石器 (131, 132)

(131) は、渦巻き状の蝶である。縁辺部には、一部敲打痕のような凹凸が見られるが、これは使用に関するものではなく、原礫自体の特徴のようである。このほか、平坦面に残る数条の筋も、自然面についたものである。(132) は小型の蝶である。明確な使用痕に欠けるため、用途不明とした。

第三章 まとめ

本遺跡からは、台地上に礫群や集石遺構が確認され、縄文時代早期時に生活が営まれていたことが明らかとなった。集石遺構は合計30基近くに上った一方で、出土遺物は少量に留まつた。遺物は、出土した土器の時期的考察から、前平式土器や吉田式土器といった早期の古い段階から、貝殻条痕文土器を経て桑ノ丸式土器、下剥峰式土器の早期中葉までが主でとし、これに共伴する資料として楕円押型文土器も1点確認された。この土器は、文様は細粒である点は、押型文土器の中でも古い要素であるが、器壁が同時期のものよりもやや厚いため、若干時期は下りうる。また、早期後半に位置づけられる塞ノ神式土器の出土は1点のみであり、この時期では殆ど使用されなかったようである。

G区からは、台地の縁辺に沿うように集石遺構が検出され、この地点で調理等が行われたことを窺わせる一方で、包含層よりおびただしい数の黒曜石のチップや二次加工剥片及び小型の原礫が出土した。剥離の規模や原礫の大きさより、当時ここで石錐の製作も行われたと考えられる。

胎土(長石:A、角閃石:B、白色粒:C、石英:D、砂粒:E、雲母片:F、多量:多、中量:中、少量:少、微量:微)

No	部位	外 面 調 整	内 面 調 整	色 調	胎 土	備 考
5	口縁部	斜方向条痕→貝殻腹縁刺突→ナデ	ナデ	10YR 3/4	A少B中E中	
6	口縁部	工具による押引文→刺突文	丁寧な磨き	10YR 5/3	D多F中	外面に煤付着
7	口縁部	模状突起貼付→貝殻腹縁刺突	横位のナデ	2.5Y 8/4	B少C中E少	
8	口縁部	斜方向条痕→貝殻腹縁刺突	口縁部横位、下部縫合位の磨き	10YR 6/6	A少B少C中E少	内面に焦付着
9	口縁部	斜方向条痕→貝殻腹縁刺突	磨き	2.5Y 7/3	A多B少C少E微	
10	口縁部	斜方向条痕→貝殻腹縁刺突	磨き	10YR 6/3	A多B少C少E微	
11	口縁部	斜方向条痕→貝殻腹縁刺突	磨き	2.5Y 8/4	A多B少C少E微	
12	口縁部	斜方向条痕→貝殻腹縁刺突	横位の磨き	10YR 7/4	A多B少C少E微	
13	口縁部	斜方向条痕→貝殻腹縁刺突	磨き	10YR 8/6	A多B少C少E微	
14	口縁部	斜方向条痕→貝殻腹縁刺突	磨き	10YR 7/4	A中B中C微E少	
15	胴部	斜方向条痕	磨き	10YR 7/3	A中B少C微	
16	胴部	斜方向条痕	磨き	10YR 8/4	A中B微C少	
17	胴部	斜方向条痕	磨き	10YR 7/4	A中C少	
18	胴部	ナデ→櫛状の工具による波状文	崩き	2.5Y 5/4	A微D多E少	
19	口縁部	ナデ→短沈線文	横位のナデ	10YR 6/4	A少B中C中D微	
20	胴部	ナデ→羽状の短沈線	横位の糸いナデ	10YR 5/4	A微B微D多F微	
21	胴部	ナデ→羽状の短沈線	縫位の糸いナデ	7.5YR 6/4	A微B少D多F少	
22	胴部	縫方向ナデ→工具による刺突	斜位の糸い磨き	5 YR 5/6	A中B少C中	
23	底部	工具による刺突	ローリングにより不明	7.5YR 7/6	A中B中C少D中	
24	口縁部	ナデ→工具による刺突	横位の磨き	10YR 6/4	B微C中D多F中	内面に煤付着
25	口縁部	横方向ナデ→沈線、刺突	横位のナデ	7.5YR 4/4	A中B中C中	外面に煤付着
26	胴部	横位の細粒滑円押型文	糸いナデ	5 YR 6/6	A少B少C微	
27	口縁部	突起貼付→工具や貝殻部による刺突	横位のナデ	5 YR 4/6	A中B少C微	
28	胴部	貝殻腹縁刺突	横位のナデ	5 YR 6/6	A中B少C微	
29	胴部	貝殻腹縁刺突	横位のナデ	5 YR 6/6	A中B少C微	
30	口縁部	斜方向条痕	ナデ	5 Y 7/2	A微B中C少	
31	口縁部	斜方向条痕	ナデ	5 Y 7/2	A微B中C少	
32	胴部	斜方向条痕	ナデ	10YR 7/4	A多B少C少D微	
33	胴部	ナデ	ナデ	10YR 7/4	A中B微C少	
34	底部	ナデ	ナデ	10YR 8/4	A多B少C少	

表2 出土遺物観察表(繩文時代土器)

表3 出土遺物觀察表（縄文時代石器）

No	器種	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	石 材	備考	No	器種	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	石 材	備考
35	石板	2.0	1.5	0.35	チャート		84	石板	1.4	0.35	黒曜石		片側部欠損
36	石板	2.2	1.5	0.4	チャート		85	石板	1.9	1.3	0.35	黒曜石	
37	石板	2.15	1.5	0.4	チャート		86	石板	1.6	1.3	0.35	黒曜石	片側部欠損
38	石板	1.5	0.45	チャート		失墜部・片側部欠損	87	石板	1.6	0.5	チャート	片側部欠損	
39	石板	1.55	1.3	0.3	チャート		88	石板	—	—	—	黒曜石	片側部欠損
40	石板	1.7	1.3	0.4	チャート		89	石板	—	—	0.3	チャート	黒曜石
41	石板	1.7	0.4	チャート		片側部・片側部欠損	90	石板	—	—	0.35	チャート	片側部欠損
42	石板	0.3	0.55	チャート		失墜部・片側部欠損	91	石板	—	—	0.35	チャート	片側部欠損
43	石板	0.3	0.65	チャート		失墜部・片側部欠損	92	石板	—	—	0.35	チャート	片側部・片側部欠損
44	石板	—	0.65	チャート		片側部欠損	93	石板	—	—	0.35	チャート	片側部・片側部欠損
45	石板	1.8	1.3	0.3	チャート		94	石板	—	—	0.35	チャート	片側部のみ
46	石板	—	0.3	チャート		片側部欠損	95	石板	—	—	0.4	チャート	片側部のみ
47	石板	1.3	0.5	チャート		片側部欠損	96	石板	—	—	0.6	チャート	片側部のみ
48	石板	1.4	1.4	0.4	チャート		97	石板	—	—	0.6	チャート	片側部のみ
49	石板	—	0.4	チャート		片側部欠損	98	石板	—	—	0.65	チャート	片側部・片側部欠損
50	石板	1.85	0.45	チャート		片側部欠損	99	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・片側部欠損
51	石板	1.8	0.4	チャート		片側部欠損	100	石板	—	—	0.45	チャート	片側部のみ
52	石板	1.65	1.3	0.3	チャート		101	石板	—	—	0.45	チャート	片側部のみ
53	石板	—	0.3	チャート		片側部欠損	102	石板	—	—	0.45	チャート	片側部のみ
54	石板	1.5	0.45	チャート		片側部欠損	103	石板	—	—	0.45	チャート	片側部のみ
55	石板	1.5	1.2	0.3	チャート		104	石板	—	—	0.45	チャート	片側部のみ
56	石板	—	0.35	チャート		片側部欠損	105	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・片側部欠損
57	石板	1.3	0.4	チャート		片側部欠損	106	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
58	石板	1.3	1.25	0.35	チャート		107	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
59	石板	—	1.2	0.36	チャート		108	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
60	石板	—	1.4	0.2	チャート		109	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
61	石板	—	1.1	0.2	チャート		110	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
62	石板	—	1.05	0.25	チャート		111	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
63	石板	—	1.8	0.45	チャート		112	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
64	石板	1.35	1.0	0.3	チャート		113	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
65	石板	1.35	1.05	0.3	チャート		114	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
66	石板	1.45	1.0	0.3	チャート		115	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
67	石板	1.5	0.4	チャート		片側部欠損	116	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
68	石板	1.5	1.2	0.25	チャート		117	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
69	石板	—	1.25	0.35	チャート		118	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
70	石板	1.5	1.25	0.3	チャート		119	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
71	石板	1.4	0.3	チャート		片側部欠損	120	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・欠損あり
72	石板	—	1.7	0.25	チャート		121	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
73	石板	1.0	0.95	0.2	チャート		122	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
74	石板	0.95	0.9	0.2	チャート		123	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
75	石板	—	1.05	0.25	チャート		124	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
76	石板	1.0	1.2	0.25	チャート		125	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
77	石板	1.2	1.1	0.25	チャート		126	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
78	石板	1.1	0.2	チャート		片側部欠損	127	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
79	石板	1.35	0.25	チャート		片側部欠損	128	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
80	石板	1.35	1.35	0.25	チャート		129	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
81	石板	—	—	—	チャート		130	石板	—	—	0.45	チャート	片側部欠損
82	石板	—	1.5	0.3	チャート		131	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・片側部欠損
83	石板	—	0.3	チャート		片側部・片側部欠損	132	石板	—	—	0.45	チャート	片側部・片側部欠損



図版1 調査着手前遠景



図版2 F区遺構検出状況



図版3 G区遺構検出状況



図版4 SI-01検出状況



図版5 SI-02検出状況



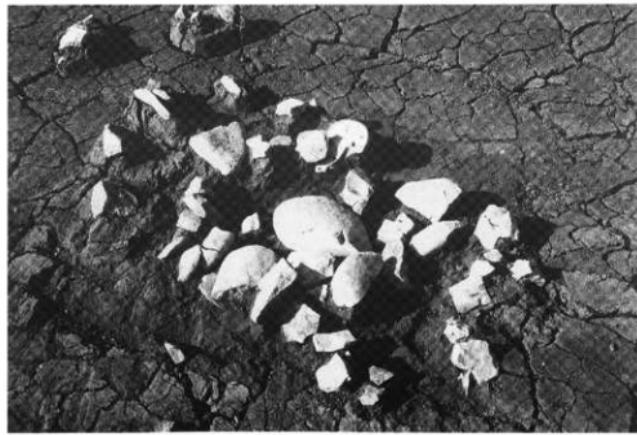
図版 6 SI-07検出状況



図版 7 SI-09検出状況



図版8 SI-12検出状況



図版9 SI-13検出状況



図版10 SI-17検出状況



図版11 SI-18検出状況



図版12 SI-19検出状況



図版13 SI-20検出状況



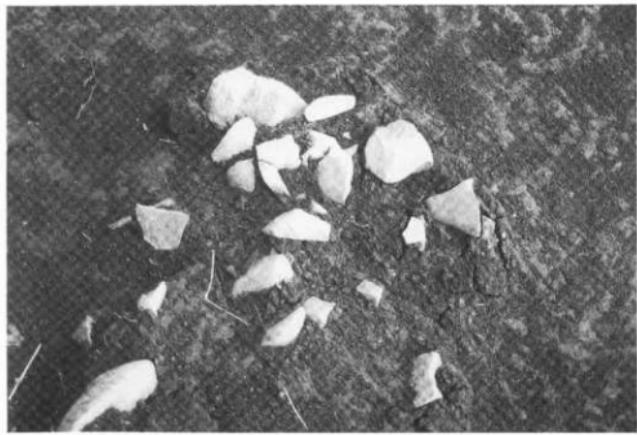
図版14 SI-22検出状況



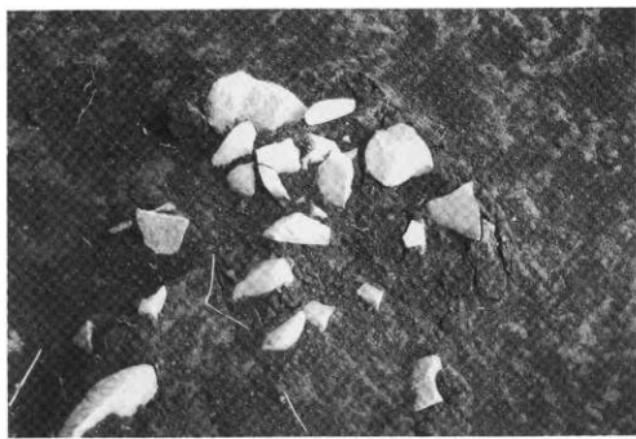
図版15 SI-23検出状況



図版16 SI-24検出状況



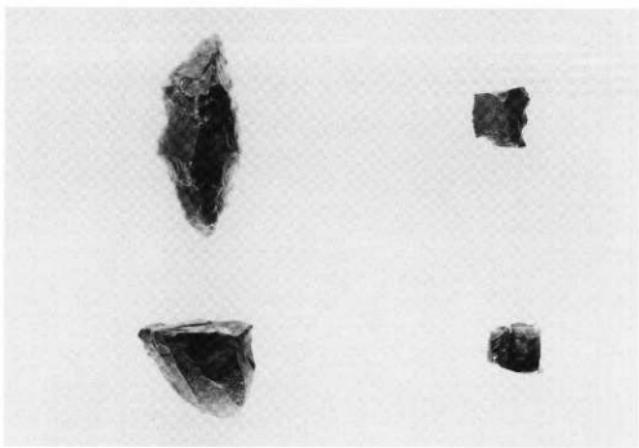
図版17 SI-25検出状況



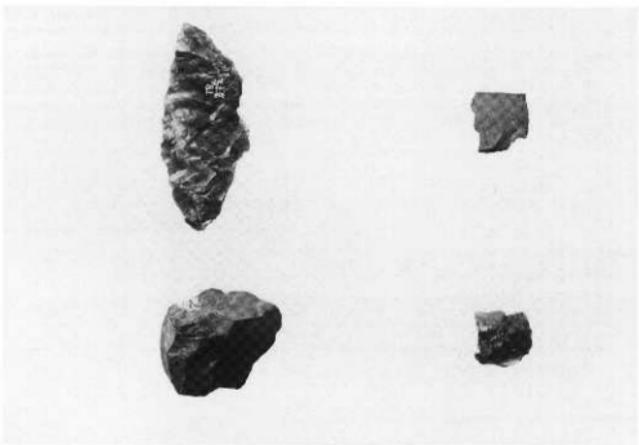
図版18 SI-26検出状況



図版19 SI-27検出状況

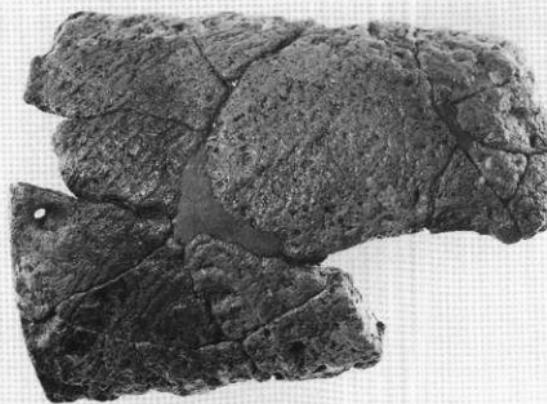
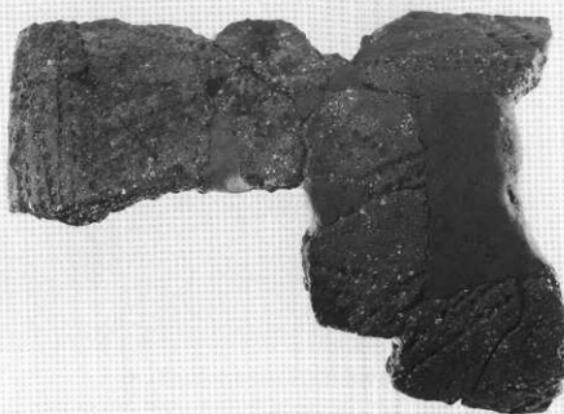


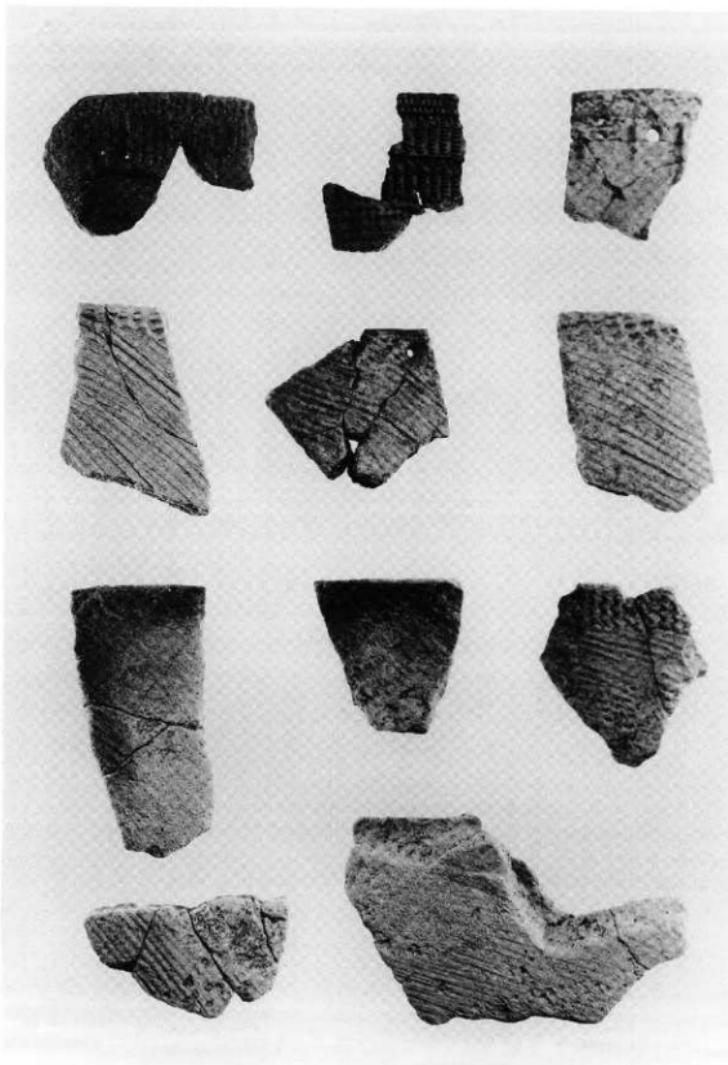
図版20 出土遺物（旧石器時代の遺物：表）



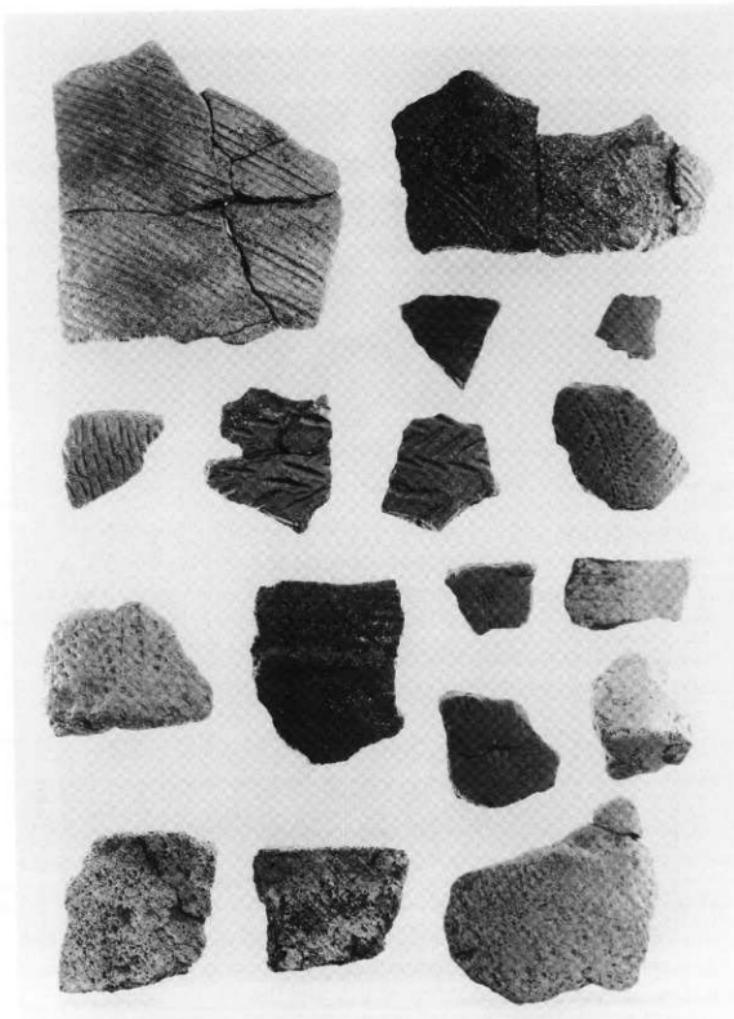
図版21 出土遺物（旧石器時代の遺物：裏）

図版22 出土遺物（縄文時代の土器）

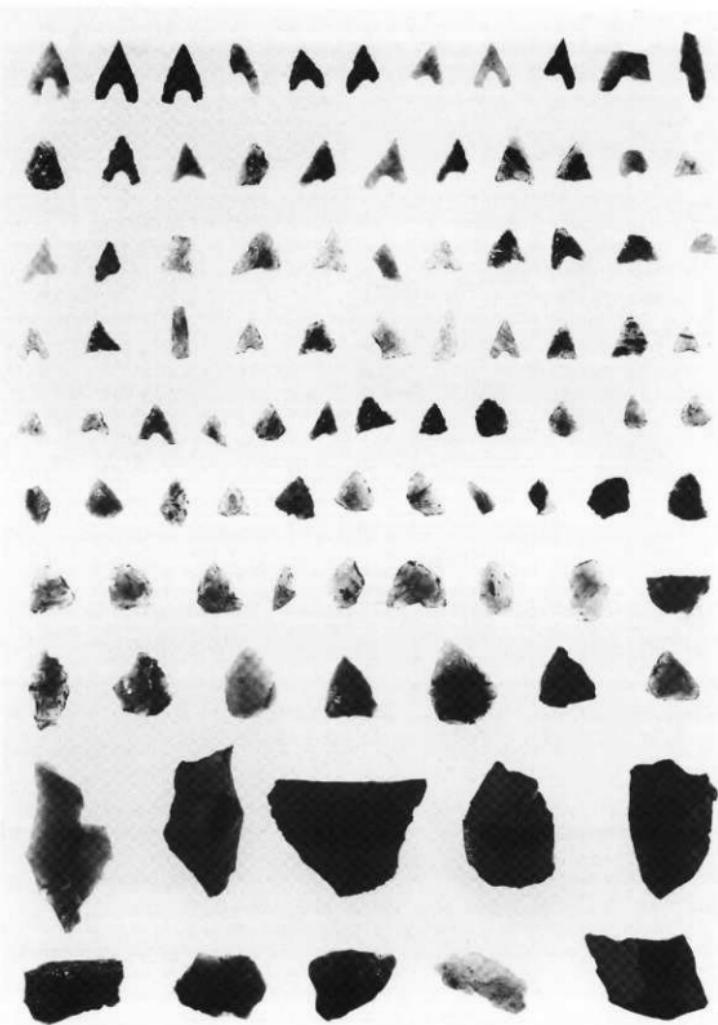




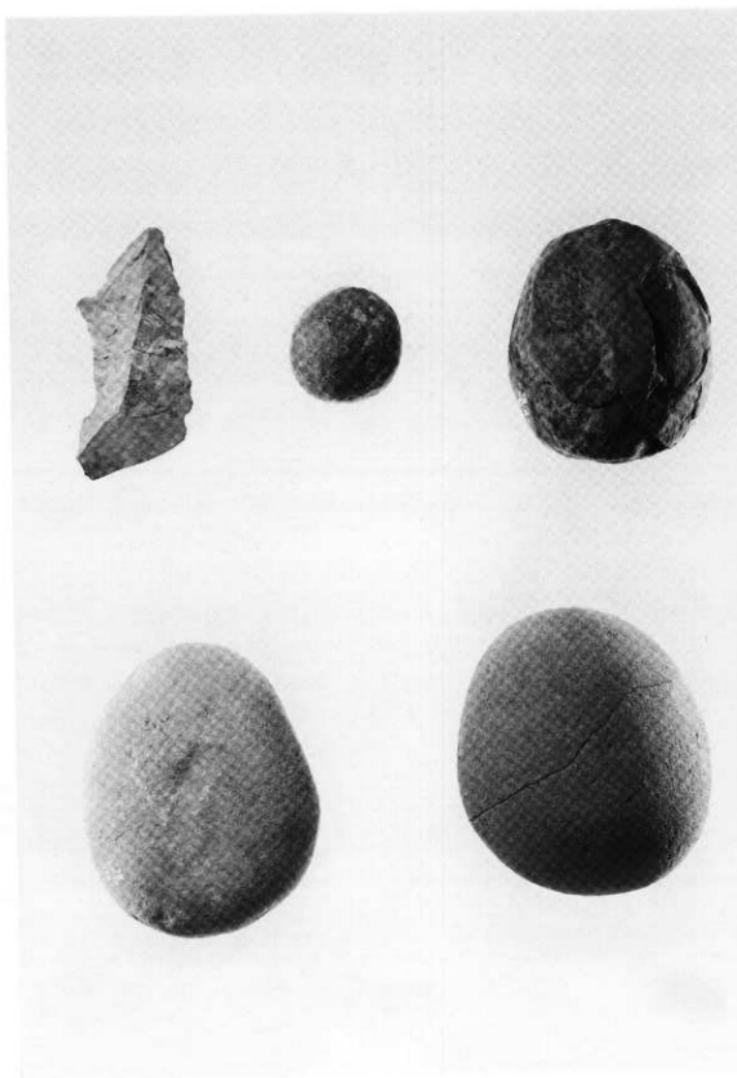
図版23 出土遺物（縄文時代の土器）



図版24 出土遺物（縄文時代の土器）



図版25 出土遺物（縄文時代の石器）



図版26 出土遺物（縄文時代の石器）

報告書抄録

ふりがな	たかのばるいせき		
書名	高野原遺跡（E区～G区）		
副書名	平成7年度県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報		
シリーズ名	田野町文化財調査報告書	シリーズ番号	第36集
編者名	田野町教育委員会 文化財調査事務所 金丸武司		
編集機関	田野町教育委員会	所在地	宮崎県宮崎郡田野町甲2818番地
発行年月日	2000年（平成12年）3月		
ふりがな	たかのばるいせき		
所取遺跡名	高野原遺跡（E区～G区）		
ふりがな	みやざきけんみやざきぐんのちょうもとの		
遺跡所在地	宮崎県宮崎郡田野町元野甲13214-1外		
市町村コード	遺跡番号		2004（元野）
調査期間	平成7年9月10日～12月7日	調査面積	5,450m ²
調査原因	平成7年度県営農地保全整備事業元野地区		
主な時代	旧石器時代、縄文時代早期	主な遺構	集石遺構
主な遺物	ナイフ形石器、細石刃核、吉田式土器、貝殻条痕文土器、桑ノ丸式土器、押型文土器、塞ノ神式土器、石鏃、磨石、剥片、碎片など		

田野町文化財調査報告書 第36集
高野原遺跡（E区～G区）

発行年月 2000年3月
編集・発行 田野町教育委員会
印 刷 株式会社 宮崎南印刷